

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳批評

山岡洋一

- 芝山幹郎訳ヘイウッド・グールド著『カクテル』

小説は娯楽だと言い切り、エンターテイナーに徹する翻訳家、芝山幹郎による「二十世紀末をいどる高級娯楽翻訳」を紹介しよう。

私的ミステリ通信（最終回）

仁木めぐみ

- 新旧ミステリの女王

現代の「ミステリの女王」エリザベス・ジョージが、本格ミステリ黄金期の「ミステリの女王」アガサ・クリスティの『スタイルズ荘の怪事件』のために書いた序文を紹介する。

ひとさまの誤訳（第5回）

柴田耕太郎

- 『誤訳の構造』（中原道喜著・吾妻書房刊）

著者がはしがきで言うように「これだけ心得ていれば、英文解釈もまず免許皆伝」といえる内容ある本だが、当然、瑕疵はある。弘法も筆の誤り、をお楽しみください。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

芝山幹郎訳ヘイウッド・グールド著『カクテル』

この何か月か、翻訳物の小説ばかりを読んでいる。昼間は経済、経営、金融といった分野の翻訳で生活費を稼ぎ、夜になると机に足を投げ出すか、布団に寝ころがって小説を読む。ほんとうはそんなことをやっている場合ではないのだが、生活費稼ぎの翻訳のために読んでおくべき本や文献が山ほどあるのだが、かまうもんかと小説を読みつづけている。

翻訳物の小説を読むのは仕事のためという面もないわけではないが、何よりも楽しみのためだ。だが、なかには素直に楽しめない本もある。いや、素直に楽しむことができない本の方が多いといえるほどだ。何点か連続して楽しめない本にぶつかると、だんだん不機嫌になってくる。楽しみのために読む小説が楽しくないというのは、いったいどういうことなんだと向かっ腹すらすらたってくる。

たとえば、スコットランドを舞台にしたある本では「南部〔イングランド〕」とか、「アルスター女〔アイルランド系〕」とかの馬鹿げた割注が大量についていた。別の本を読むと、〔これは間違い。原著者の記憶違いか〕という割注まであった。

次の本を読むと、「猫のゆりかご〔日本でいう「あやとり」〕」と書かれていた。これには参った。「良い朝を〔日本語でいう「おはよう」〕」と書くようなものではないか。もちろん、原文の cat's cradle を単純に「あやとり」と訳すわけにはいかない理由があった。その後猫の話になるのだから。だが、プロである以上、読者からお金をいただく以上、技をみせてほしい。これではお勉強になって読書を楽しめなくなる。

もちろん、問題は割注だけではない。だが、こういう割注をつけて平然としているのは、翻訳者の姿勢がどこかおかしい証拠なのだ。そして、その姿勢は翻訳のすべての面にあらわれる。割注は一例にすぎない。たとえば、〔これは間違い。原著者の記憶違いか〕という割注についていうなら、間違いなら黙って直すのが翻訳者として当然の姿勢だ。戯曲の台詞に間違いがあったとしよう。俳優が舞台上で戯曲どおりに台詞をしゃべり、その後独り言のように「この台詞は間違い、作者の記憶違いでしょうか」といったらどうなるか。この一言で、観客は白けるに決まっている。勉強会じゃない

んだから、勘弁してほしいと思うに決まっている。翻訳は違うという理由がはたしてあるのだろうか。

大上段に構えた議論をするなら、欧米の小説が日本に紹介されるようになって 150 年たったいまでも、肝心の点が理解されていない面があるのだ。肝心の点とは、小説が娯楽だという当たり前の点である。これを象徴するのが「文学」という言葉だ。小説ではなく文学、そして文学ではなく、文学なのだ。日本人の作家が書いたものは小説だが、欧米の作家が書いたものは文学だとされている。翻訳者の肩書もたとえば英米小説翻訳者ではなく、英米文学翻訳家、あるいは英米文学者だ。文学者ではなく文学者である。もちろん、わたしは学者ですなどという人はまずいない。そこまで愚かな人はいまでは少なくなった。だが、翻訳者が文学者であった時代、翻訳が研究のためのものであった時代に作られた慣習、たとえば割注という慣習を笑い飛ばせる人はそう多くない。小説は娯楽だと言い切れる人はそう多くない。エンターテイナーに徹する人はめったにいない。エンターテイナーとして通用するほどの知性と教養と才能がない翻訳者の絶好の逃げ場になっているのが、文学研究という建前なのだ。

翻訳物の小説を次々に読んでいて、外れがいくつも続いたとき、無性に読みたくなかったのが、芝山幹郎訳の『カクテル』だ。芝山幹郎が翻訳の世界に事実上はじめて登場したのがこの作品だ。殴り込みをかけたというべきかもしれない。それほど強烈な作品なのだ。原著も強烈だが、翻訳も強烈だ。

知り合いの編集者によれば、芝山幹郎はインテリやくざなのだそう。まさに至言だと、『カクテル』を読みなおすと痛感する。インテリだから、しっかりと原文を読み込んで破綻なく翻訳する。やくざだから、権威を歯牙にもかけない。訳者あとがきで芝山はこの作品を「二十世紀末をいどる高級娯楽小説」としている。文学ではなく娯楽なのだ。そして翻訳も、それに相応しい。日本語の高級娯楽小説として目一杯楽しめる高級娯楽翻訳だ。

じつはもうひとつ、インテリやくざとは言いえて妙ではないかと思わせる点がある。酔っぱらっている場面、らりっている場面、悪態をつく場面、殴り合いの

場面、セックスの場面になると、筆が一段と冴える。言い換えれば、文庫本で 600 ページの『カクテル』全編で、芝山の筆は冴えわたる。『カクテル』はそういう小説なのだ。筋はあるようでないようなもの。パーティーを主人公に、芝山によれば「地獄めぐり」のような半年間を描いた作品だ。プロットなどおかまなし。ネタバレの心配はなし。ひたすらパワフルな文章で 20 世紀末のアメリカを描き、一気に読ませるのがこの小説だ。

具体例をあげるのは容易ではない。まず、原著がむずかしい。もう 15 年もまえ、訳書をはじめたとき、原著も読んでみようとしたが、とても歯が立たなかった。凝った表現がふんだんに使われているし、酒場から 1980 年代のニューヨークを描いた小説だから、俗語も多いし、あまり馴染みのない固有名詞が大量にでてくるし、もちろん、カクテルの名前をはじめ、酒の話が大量にでてくる（アルコールが飲めない体質だから、カクテルの名前など知っているはずがない）。辞書を引かなければちんぷんかんぷん、辞書を引いても分からない部分が多すぎた。こんな本を 600 ページも訳したというだけで、脱帽するしかないと思った。いま読みなおしても、その印象はそれほど変わらない。だがもちろん、そんな部分ばかりではない。たとえば次のような文章もある。

それでもこの仕事はやめられなかった。夕方の早い時間の酒場には、なにかがある。たとえば、窓をぬけて差し込んでくる光の矢が酒壇を射抜く。角氷を二、三個ロックグラスに落とし、それを掲げてみる。するとどうだ、グラスはプリズムになるではないか。マティーニの縁どりは水銀のようにゆらめく。マンハッタンは幼年時代の恋人の髪のように、たそがれのなかで鶯色にゆれる。ニュージャージーのむこうに太陽がおおいそぎで沈むと、カクテルは夕方よりもきりりと冷え、さっきより早足で脳髄にとどく。娘たちはきれいになる。今夜、もしかすると生涯の恋人に出会えるかもしれない。そんな期待の気配を、彼女たちは身にまとうのだ。くちびるがまんなかで分かち、身をのりだして人の話に耳をかたむけ、いつもより大きな声で長く笑うようになる。男たちはめいっばい優雅にふるまおうとする。「ブリーズ」と「サンキュー」と「エクスキューズ・ミー」とが店にあふれる。こうしたカクテル・アワーに喧嘩を見かけることはめったにない。客を力づくで店から追い出さなければならぬ事態も、まずないといってよい。もめごとが生じるのはもっとあと、闇の色が濃くなってからのことだ。なにかかもが有刺鉄線のようにささくれだち、娘たちの髪は乱れ、男たちはふさぎこみ……そう、希望がすべて死に絶えてしまっただけのことだ。（芝山幹郎訳 グールド著『カクテル』文春文庫 442～443 ペー

ジ)

I couldn't not help it. There's something about a saloon in the shank of the evening. The way the light streams through the windows and hit the bottles. You drop a few ice cubes in a rock glass, hold it up, and bingo, you've got a prism. Martinis have a quicksilver glitter about them. Manhattans are auburn in the twilight like the hair of your childhood sweetheart. As the sun sinks quickly behind New Jersey, the cocktails are colder, they reach your brain quicker. The girls are prettier. They have an expectant air about them as if this might be the night they meet the love of their lives. Their lips are parted, they lean forward to listen with a bit more attention, they laugh louder and longer. The guys are on their best behavior, "pleases," "thank-yous," "excuse me," all over the place. You very rarely see a fight during the cocktail hour, and almost never have to make a forcible ejection. That comes later, in the dark of night, when everything goes down like barbed wire, the girls are disheveled, the guys are brooding -- and all hopes have gone for naught. (Heywood Gould, *Cocktail*, Pocket Books, p. 254)

たとえば、and bingo という何でもない言葉が「するとどうだ」と訳されている。また、the cocktails are colder, they reach your brain quicker という何ということもない文章が、「カクテルは夕方よりもきりりと冷え、さっきより早足で脳髄にとどく」と訳されている。翻訳はこうでなければいけない、それよりも日本語はこうでなければいけないと思える訳文ではないだろうか。

残念なことだが、『カクテル』は絶版になっていて、古書店でしか買えない。ヘイウッド・グールドが小説を書かなくなり、『カクテル』の言葉を借りれば、「ハリウッドに自分を売りわたしてしまった」（69 ページ）からかもしれないが、アメリカでも原著が絶版になっている。

だが、芝山幹郎が『カクテル』を「高級娯楽小説」だと言い切ったことの意味は小さくないと思う。文学ではない、娯楽なんだといっているのだ。「二十世紀末をいどころ高級娯楽小説」をここまで見事に訳したのだから、「二十世紀初めをいどころ高級娯楽小説」ともいべき『ユリシーズ』を芝山幹郎が訳したらどんな作品になるだろうか。これは『カクテル』をはじめたときに思ったことだが、何年かぶりに読み返して、その思いがさらに強くなった。『カクテル』はどこか、『ユリシーズ』を連想させる小説なのだ。

新旧ミステリの女王

昨年6月号から始めさせていただいた「私的ミステリ通信」、途中何度かお休みをいただきましたが、おかげさまで10回の連載を終えることができました。今回はおまけの1回ということで、未訳のミステリの紹介という枠を離れて書かせていただきます。

ここに一冊のペーパーバックがあります。Randomhouse Modern Library Classics 版の The Mysterious Affair at Styles、そう、アガサ・クリスティの『スタイルズ荘の怪事件』（田村隆一訳・ハヤカワミステリ文庫 / 田中西二郎訳・創元推理文庫）の原書です。クリスティといえば紹介の必要もないほどの大御所、今なお人気不衰「ミステリの女王」です。クリスティをTVドラマの名探偵ポワロやミス・マーブルでご存知の方も多いでしょう。抜群の知名度を誇るクリスティは60編以上の長編ミステリを書いた多作家ですが、その作品に「はずれ」がありません。また、平明でリズムのある文体であり、ミステリマニアならずとも気軽に楽しめる作風であるという二つの点でクリスティを抜ける者はいまだにいないかもしれません。

そして気軽に楽しめるからといってあなどってはいけないのが、謎の面でのクリスティの実力です。近代本格ミステリで初めて、ということをとくさんやっているのです。代表作でもある『アクロイド殺し』（田村隆一訳・ハヤカワミステリ文庫 / 『アクロイド殺害事件』大久保康雄訳・創元推理文庫）、『オリент急行の殺人』（長沼弘毅訳・創元推理文庫 / 中村能三訳・ハヤカワミステリ文庫）、『そして誰もいなくなった』（清水俊二訳・ハヤカワミステリ文庫）の三作の奇想天外で斬新な犯人像は、それぞれ当時の人々をあっと言わせました（どう斬新かはここでは書けません）。あまりのトリッキーさに「フェアかアンフェアか」という論争を巻き起こしたほどです。

クリスティ人気はいまだに衰えることがなく、百カ国以上で翻訳され、シェイクスピアの次にたくさん本が売れた作家だと言われています。もちろん日本でも未訳作品が皆無なほどの人気ぶりです。現在、早川書房から「クリスティ文庫」としてまた改めて出版されていることをご存知の方も多いことでしょう。

そしてこの『スタイルズ荘の怪事件』は1920年に発表された彼女の処女作であり、名探偵ポワロ登場の作品でもあります。物静かな村にあるスタイルズ荘で起こる密室殺人事件を描いたミステリであり、名探偵には欠かせないワトソン役、ヘイスティングス大佐もこの第一作からちゃんと登場しています。

しかし邦訳が何種類も出ているこの作品のペーパーバック版をなぜここで取り上げるのかというと、エリザベス・ジョージが序文を書いているのです。

エリザベス・ジョージは、アメリカ人の女流作家でイギリスを舞台にした本格ミステリを書いています。重厚な作風で知られ、発表する作品はみなベストセラーリストに入る人気作家であり、「新ミステリの女王」と呼ばれています。また最近 A Moment on The Edge という古典から現在に至るまでの女性作家による短編ミステリのアンソロジーを編んだほど、古今のミステリに造詣の深い作家でもあります。（ジョージのミステリについては、[第4回「エリザベス・ジョージ」](#)で紹介していますので、くわしくはそちらをご参照ください）。

この序文でジョージはまず、ミステリの歴史はイソップからだという、ドロシー・L・セイヤーズがアンソロジー The Omnibus of Crimes のために書いた序文を紹介し、その次に自分にとっての初めてのミステリ（聖書に出てくる脅迫と偽証とその謎解きの話です。いかにもジョージらしいですね）を紹介し、そして、20世紀のミステリの基礎を作った人物としてクリスティを紹介しています。

『スタイルズ荘……』の内容を（ネタバレしない範囲で）、丁寧に解説したあとで、ジョージは（さらに丁寧に）こう分析しています。クリスティはこの作品でその後のミステリの型を作った、と。まず別荘などの屋敷で犯罪が起こるという設定（日本でいう「館もの」ですね）、密室、そして赤いニシン（Red Herring）、つまり犯人が残す偽の手がかり……。

クリスティのミステリの構造があきらかになるとともに、ジョージの性格の丁寧さと生真面目さがうかが

える分析です。

それからジョージにしては意外な文章もあります。

In this kind of detective fiction, all extraneous material is removed. Hence, we will see no romantic interludes, no messy involvements, and no lengthy descriptions. There will be no deep philosophical reflections on the part of the narrator. There will be only the murder, ensuing investigation, the suspects, their motives, and the mystery.

こういったタイプの探偵小説においては、本筋に関係ない要素はすべて排除されている。ロマンチックな幕間劇も、複雑な男女関係も、くだかしい描写も出てこない。語り手が深い哲学的思索を披露することもない。そこにあるのは、殺人と、それに続く捜査、容疑者たちとその動機、そして謎、それだけだ。

現代のイギリス社会の実情と登場人物一人一人の心情をどこまでも詳しく描くジョージの言葉だと思うと、不思議な気がします。

しかし、次の文章を読むと、ジョージがどれだけクリスティのテクニクに感嘆しているかがわかります。

The key to the success of this style of detective novel lies in how the author deals with both the clues and the red herrings, and it has to be said that no one bettered Agatha Christie at this game.

こういうスタイルの探偵小説が成功するための鍵は、本当の手がかりと偽の手がかりを作者がいかにかまうかにかかっているが、この点において、アガサ・クリスティに勝てる者はいないと言わなければならない。

ジョージはクリスティとは全く方向性が違うように見えますが、最終的に目指しているものは実は同じなのかもしれません。この文章は新ミステリの女王が元祖ミステリの女王に捧げた最高の賛辞だと思います。

この序文の中で私は次の部分が一番好きです。

We are instead given a light entertainment to keep mind occupied while the body engages in an airplane ride, sunbath on the beach, a wait for the doctor, a tale before bed.

そのかわり、飛行機の中や海辺での日光浴や病院で順番待ちの間や、ベッドに入る前の読書の時に私たちが夢中にさせてくれる軽いエンターテインメントなのだ。

クリスティの古典ミステリの古きよき謎解きから、現代のジョージのような容赦ない迫りに満ちたミステリまで、どんなタイプのもので、ミステリは私たちを現実ではない別の世界へと連れて行ってくれるエンターテインメントです。殺人や犯罪という非日常的な事柄を扱っているからこそ、それだけ目の前の現実を忘れさせ、人を引き込み、驚かせ、時には感動させ、最後には謎が解けた爽快感を与えてくれるのです。この楽しみは一度覚えてしまうと病みつきになります。私事で恐縮ですが、私は初めて読んだ大人用のミステリ、『そして誰もいなくなった』で病みつきになって以来、いまだにその病が治っていませんが、今のところ治すつもりはありません。

「私的ミステリ通信」は、これをもちまして終了させていただきます。ここまでおつきあいいただきましてどうもありがとうございました。

ROUTE 66 A.D.

2000年の時空を超えた好奇心いっぱいの旅 ●2,600円＋税
4-334-96157-6

ローマ人が歩いた地中海

人類史上初のツアー旅行体験記

トニー・ペロテット 仁木めぐみ「訳」

海外ツアーは
ローマ時代に
始まった!

2000年前のロードマップを手に
当時の観光ルートを巡る異色の歴史紀行。
ローマからギリシア、トルコ、エジプトへ。
道中で出会う、娼婦、泥棒、見世物小屋……
人の好奇心は昔も今も変わらない。

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽 1-16-6
http://www.kobunsha.com

『誤訳の構造』(中原道喜著・吾妻書房刊)*

*底本は昭和63年1月発行の吾妻書房版。
2003年4月に聖文新社から改訂新版が出ている。

前号で、山岡洋一が鴻巣友季子をやんわりたしなめていたが、日本語としての問題点もさることながら、原文と逆の「真理」(鴻巣の‘truth’の訳語：ほんとはそんなに重い意味ではないが...)をつくってしまった箇所がコラム子としては気にかかる。...: since our passions do not last forever, our true task is to survive them. 「人の情は幾久しくつづかず、ならばその思い、長らえさせることこそ、人のつとめなり」(下線は私が引いた)とあるが、正しくは「その思いが消えても、自分が長らえること」。

survive はフランス語由来のことばで、sur は「...を超えて」、vive は vivre の変形で「生きる」。つまり「...より長生きする」の意味。...より、の部分日本人の頭には入りにくいらしく、よく誤訳される単語である。この survive と同じ意味の outlive について、『誤訳の構造』に説得性のある実例と解説が示されている。

* 以下、原文・元訳、中原の解説、私のコメントの順

(p70) 47

[例]Some men tell us that they never outlive their sense of excitement on seeing the curtain go up at the beginning of a play.

ある人たちが私たちに言うには、芝居の初めに幕が上がるのを見たときに感ずる興奮の気持ちはいつまでも残っているものではない、ということだ。(下線は中原による)

解説: outlive は「～より長生きする」というのが基本的な意味(He outlived his wife.)で、He outlived his disgrace. といえば「自分の恥が世間に忘れられるまで生き長らえた」、The idea has outlived its usefulness. は「その考えは古くなって役に立たなくなった」の意。したがって He never outlived his sense of wonder. は「どんなに年をとってもものごとに対する驚異の念を失わなかった」である。ここまでくればもう下線部の意味は明らかであろう。すなわち「興奮の気持ちは感じなくなるまで長生きすることはない どんなに年をとってもわくわくする」ことを述べている。

コメント

この解説、ほれほれしませんか。快刀乱麻を断つ、とはまさにこれ！ 鴻巣さんも本書で勉強していれば、苦し紛れの訳文は作らなかったことでしょう。

とはいえ、どんな名著にも当然、瑕疵はある。以下は小人のよくやる難癖、揚げ足取りの類と思っていたが結構ですが、弘法も筆の誤り、をお楽しみください。

(p1)

解説: しばらく前に、“読書人の雑誌”をうたうある雑誌に、「日記のなかから」と題する、カトリックと深いかかわりをもつ ある高名な作家による巻頭随筆がのっていた。次のような書出しだった。

一昨日、それを読んだために非常に衝撃を受けた言葉がある。

フィリップ・ストラトフォードの「信仰と文学」という本のなかの一節だ。...

インタビューで老いたモーリアックはこう言ったという、「私は小説のなかで信仰を失ってしまった」と。

そして、このくだりは、次の言葉で締めくくられている。

(...小説家であるよりも信仰を守ろうとした...) その彼が晩年に至り、「小説のなかで信仰を失ってしまった」と告白したのが本当とすると、私は愕然とせざるをえない。この事をこれから考えてみねばならない。

引用文を枕とした名随筆である。ところが、実は、この引用文が誤訳なのである。多少とも、翻訳文を原文に還元して読むという習慣のある人ならば、この引用文の原文をすぐに推定して「ひょっとして？」という疑いを抱くはずである。筆者もそのような疑念を抱き、念のため原著を取り寄せてみた。はたして推測どおりであった。すなわち原文は

“I have lost faith in the novel.”

となっているのである。つまり、モーリアックは

「私は小説というものに対して信念を失ってしまった」(下線は私による)

と言っているのである。大違いである。なにも衝撃を受けたり愕然としたりする必要はなかったのである。

コメント

翻訳の恐ろしさをよく伝えてくれるエピソードだ。

だが直しの部分がいけない。「小説というものに対して信念を失う」ではどんな信念？と聞き返されてしまう。少なくとも「小説への信念」「小説に対する信念」ぐらいにしてほしい。

lost faith in は、「...を信用できない」「...への信頼を失う」だから、直訳的に訳せば「小説というものに信を置く気持ちを失った」ということだ。「...に対して」とのコロケーションを生かしたいのなら「信頼」が名詞として続くべきだ。

ところで、モーリアックはフランス人だから、本当の「原文」はフランス語のはず。調べ方が悪いのか見つからなかったが、英語を逐語訳で仏訳すれば、J'ai perdu (la) confiance dans le roman. とでもなるべきところ。この「高名な作家」とは遠藤周作かと思われるが、遠藤はフランス語に堪能であった(慶応仏文卒。戦後の第一回カトリック留学生として渡仏。その体験が芥川賞受賞作品『白い人、黄色い人』に反映されている)。その遠藤が、原文は何なのだろうかと考えなかったとも思えない。ひょっとしたら、狐狸庵と自らを称した遠藤の、誤訳の恐ろしさを人に知らしめようというオトボケなのかもしれない？！。

(p4)

Throughout his life, modern man is the object of influences which are directed to the end of robbing him of trust in his own power of thought.

--Albert Schweitzer: The Way to Humanity

生涯を通じて、現代人は彼自身の思考力において信念を彼から奪おうという目的に向けられた影響の対象になっている。(下線部は私)

解説：「...現代人は、自分自身の思考力に対する信念を彼から奪おうとする目的に向けられた諸種の影響をうけている」のように改められなければならない。(下線部は私)

コメント

'influences' と不可算名詞が可算化されていることに注目し、何か具体的なものに読み解かねば意味が通じない。そこで誤訳例を最小限度訂正するなら「...思考力を信頼する気持ちを彼から奪おうという目的に向け

られた目論見の標的となっている」(下線部は私)ぐらいになろう。

また中原の訂正訳では「諸種が影響する」のか「諸種の影響が何かを及ぼすのか」わからない。ここは意訳して「作用」(=ある原因が別の物質または場を与える影響)の語を使うと訂正訳が生きそうだ。「諸種の影響を受けている」「諸々の作用を及ぼされている/受ける立場にいる/受けざるを得ない」。

そもそもこれは英語のネイティブでないシュバイツァーが書いただけあって、かなりの悪文である。誤訳例の指摘にはふさわしくないのはでないか。

(p18) he had a German grandmother

解説：彼にはドイツ人の祖母がいた—(中原の訂正訳)

コメント

細かいことだが、アメリカでは - 系というのに、そのまま 人ということがあるので気をつけねばならない。「ドイツ人」なのか「ドイツ系」なのか、ここだけではわからない。

(p23) 4

[例]He lived ... in a fine house ..., which he had left to the school in his will.

彼は...美しい家に住んでいた。この家は彼の意志で学校に寄贈したものだ。(下線部は中原)

解説：「自分の意志で」という意味ならば前置詞は by でなければならない。in one's will の場合は「遺言で」の意であり、校長である“彼”は、自分が死ぬば、住んでいる邸宅が学校に寄贈されることになることを、あらかじめ遺書に記していたのである。

コメント

「遺書」では、死ぬ前の書き置きかと思ってしまう。「遺言書」

(p44) 26

[例]The hawthorn was exploding white and pink and red along the hedge and the primroses were growing underneath in little clumps, and it was beautiful.

山査子(さんざし)は生け垣にそって、白い花、桃色の花、赤い花、が咲き乱れ、桜草は小さな茂みの下で伸びてきて、それがまたなんともいえない。(下線部は中原)

解説：(略)したがって[例]の英文は、さんざしが生け垣にそって色さまざまに咲き乱れているのに対し、可憐なさくらそうは「下のほうで小さくかたまって」生えていた、ことを述べている。(下線部は中原)

コメント

underneath in little clumps 副詞 + 前置詞 + 名詞の説明はこれでよい。だが解説の「さんざしが生け垣にそって」はまずい。「さんざし」と「生け垣」は別のものでなくさんざし = 生け垣、なのである。春、私たちの目を楽しませてくれる東京都心部の道路わきに連なるつつじの植栽。「つつじが植栽にそって」としたらおかしいのと同じ。この along は、...の端から端まで、の意。「さんざしの生け垣には」とする。

(p83) 59

(b) Andrew fell in love with Frances. He was the only child of happily married parents. Frances too was an only child.

--Iris Murdoch: The Red and the Green

解説：アンドルーはフランスと恋におちた。彼は幸せな結婚生活を送っている両親の一粒種であった。フランスもまた、ひとりっ子だった。(中原の訳)

コメント

fall in love with ~ は「~を恋する」(with は目的・対象を示す)。互いに恋するなら each other が入らねばならない。「と恋におちた」「に恋した」

(p134) 96

There is always something to be said for remaining ignorant of the worst. I have never told a cancer patient yet that there is no hope any longer.

最悪の事態を知らないままではいけない。おれも癌患者にもう希望はないと言ったことはなかった。(下線部と太字は中原)

解説：したがって上の下線部は次のような意味を表す。「最悪の事態を知らないままではいけない」ということに賛成して述べられるべきことが常にいくらかある 最悪の事態を知らないでいるということは常に望ましい(常によい)ことなのだ」

コメント

この something は「ある部分の理があるということ」。例：There is something to it.(それにも一理ある)。前半の直訳部分はよいが、後半「常に望ましい(常に

よい)ことなのだ」は「よいこともあるのだ」に直す。

(p190) 135

(3) There is no one single argument for democracy, any more than there is one single form of government that should be reckoned a democracy.

--J.R. Lucas: Democracy and Participation

解説：民主主義を擁護する唯一の議論というものがないのは、民主政体と考えられるべき唯一の政治形態が存在しないのと同じである。(中原の訳)

コメント

argument は、ここでは「論拠」「理由」の意味。

(p198) 141

Only with the experience of different subjects can anyone make an intelligent choice of specialization in the first place, let alone be able to see his subjects in any kind of perspective.

解説：(準否定語 only を中原が丁寧に説明してくれているので、まずその箇所を引く)

(略)... Only a heartless man can desert his wife, let alone kill her.

一見すれば、この英文は肯定文を受ける let alone で、(=still more) に該当するようにおもわれる、とすれば訳文はこうなる。

「冷酷な人間のみが、妻を殺すことはもとより、妻を見捨てることができる」

前述のように、この訳文では、妻を「殺す」ことは「見捨てる」ことよりも容易である、という前提に立つことになる。明らかにこれは一般通念に反する。こんなヘンな訳文を生み出させた犯人は only である。only は肯定詞の姿を装いながら、実は否定詞の働きをする曲者。すなわち、は次のつもりで、否定的に訳をまとめること。

' None but a heartless man can desert his wife, let alone (=still less) kill her.

" Unless a man is heartless, he cannot desert his wife, let alone (=still less) kill her.

(冷酷な人間でなければ、妻を殺すことはもとより、妻を見捨てることなどできない)...

(それから参考として、次の5行に続き、上掲の英文と以下の中原による正誤訳が示される)

「現代の知識の分野は広大で、社会に出て役に立つ知

識を身につけるためには、大学での研究は専門化せざるをえない現状にあるが、専門化の必要が大きければ大きいほど、広い一般教養の基礎が必要である」という文に続くもの。

[誤]いろいろな分野の学問を経験してのみ、広い視野に立って自分の専門分野を見ることができることはもとより、第一に自分の専門を賢明に選択できる。

[正]いろいろな分野の学問を経験しなければ、広い視野に立って自分の専門分野を見ることができないのはいうまでもなく、そもそも何を専門に研究するかを賢明に選ぶことさえもできない。(または「...を経験しなければ...を選択することはできず、ましてや...を見ることができない」の形式でもよい)(下線部は中原)

コメント

ここ[正]訳がおかしい(かっこ内の訳はよいが)、というとうとうどうしてと思う人がいるかもしれない。日本語はわりと規則があいまいなので、英語の still less と still more ほどははっきりした劣等比較、優等比較のきまりはない。それでも、言葉のつながり具合とか常識的な語感といった準則はあるのである。

・ **準則 1** 「...はいうまでもなく」の、... には自明の理がくる

「...はいうまでもなく」と読んだ時点で、読者はどちらかがあとにくることを予想するはず。

A 「...はいうまでもなく」 「～など(できない)」

B 「...はいうまでもなく」 「～さえ(できない)」

例 A 初等数学ができないのはいうまでもなく、高等数学などではできない

例 B 高等数学ができないのはいうまでもなく、初等数学さえではできない

つまり「いうまでもなく」は let alone と同じく劣等優等比較にも、優等劣等比較にも使えるが、あとに「さえ」がくるか「など」がくるかを見てはじめて、どちらの比較なのかがわかる仕組みだ。たいていは「いうまでもなく」の具体例が納得できるものであるから、次が劣等なのか優等なのかの予測が付き、安心して読み進んでゆける。具体例がこの場合(専門分野を見る)のようにわかりにくい表現だと、ここでとまどってしまう。

・ **準則 2** 「そもそも」は、比較の強調というより、根本的な原理または別の観点をもってくるのに用いる。

「そもそも」を目にした時点で読み手は何か力強い原理が観点が次にくるのを期待するが、いや劣等比較の強調なのだなどと判断を修正するためストレスが生じる。

期待される後半部は例えばこんなもの：「いろいろな分野の学問を経験しなければ、広い視野に立って自分の専門分野を見ることができないのはいうまでもなく、そもそも学問の何たるかがわかろうはずがない」(下線部は私)

・ **準則 3** 「そもそも」「さえ」のコロケーションは、前の節がわかりやすい例で、後の節が強調されるにふさわしい例のとき用いる。

例：一生懸命勉強しなければ、大学に合格することができないのはいうまでもなく、そもそも高校を卒業することさえもできない。

[正]訳は、後の節が「そもそも」「さえ」の対を持ってくるほど人を顔かせるものでないから、押し付けがましさを感ぜさせてしまう。

これらの準則は経験則に近く、文法規則のようにきっちりあてはまるものではないから、「感じ方の問題だよ」とないがしろにされがちだ。だが1度ならともかく、この短い文で3度、読み手の意識が一時停止するとなると、神経質な読者の「感じ方の問題」ではすませないはずだ。間違いとはいわないまでも、少なくともこれは悪文である。順序を逆にして、次のようにしてはどうか。

「いろいろな分野の学問を経験しなければ、何を専門に研究するかを賢明に選ぶことができないのはいうまでもなく、(ましてや)広い視野に立って自分の専門分

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

翻訳力錬成テキストブック

柴田メソッドによる英語読解

柴田耕太郎著

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定
実践的な翻訳技術養成講座

日外アソシエーツ

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

野を見ることなどできはしない」

私は日本語が世界に尊敬される言語となるためには、文法規範と用例の厳密さを高めてゆかなければならないと思う。英語だとて規範がきちりしているからこそ、私たちも意欲をもって学ぼうという気になるのではないか。いい加減でない日本語は、まず私たち翻訳関係者が確立してゆくという自負と情熱を持ちたいものだ。

(p249) 182

[例]Zee: you begged me, you asked me

Robert: In my cups.

Zee: You crossed your heart.

Robert: Well, I'm uncrossing it.

ズイー：「私に向かって哀願したくせに」

ロバート：「酔いのせいだ」

ズイー：「あなたは自分の決心を裏切ったのよ」

ロバート：「そうかい。じゃ、もう一度裏切るよ」

(下線部は中原)

解説：cross one's heart は「胸に十字を切る」の意で、自分の言葉が偽りでないことを誓うときに行う動作である。だから、下線部およびその応答は、
ズイー：「あなた(十字を切って)誓ったのよ」
ロバート：「そうかい、じゃ、誓いなおすよ」といったものでなければならない。

コメント

「誓いなおす」では、「もう一度誓う」意味になってしまう。ここは uncrossing 誓いを元に戻す、つまり「誓いはやめた」といっている。

ほかに誤字・脱字はいくつかあるものの、私が十回精読してなんとかケチをつけられそうなのが、たったこれだけ。著者がはしがきで言うように「これだけ心得ていれば、英文解釈もまず免許皆伝」といえる内容ある本なのだ。ぜひ皆さんにお勧めしたいが、はたしてどれだけの人が通読できるだろうか？

アイディ『英文教室』受講生募集のお知らせ

柴田耕太郎

英文を精確に読み解く語学力と論理力があれば、翻訳は自ずと出来るものと私は確信しています。

学校教育の欠陥からか、この二つを備えた翻訳志望者はせいぜい 20 人に 1 人(アルク翻訳大賞の審査経験から)。私が主宰するこの教室では徹底した精読訓練を通じ、「一点の曇りなく読み解く」技術の習得を目指します。

大学生をふくむ翻訳家志望者、翻訳書編集者、語学教員、その他卓抜な英文読解力をつけたい社会人の入門を期待します。

9 月より定数集まり次第、開講。精読エッセイ 100 題、出版翻訳 25 題、読み解きポイント 50 講など各種講座があります。

株式会社アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

『翻訳力練成テキストブック』の著者が自ら講じる
読むための英語のすべてを伝える講座です

事務担当 前川 / 岡里

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル